

高温並びに今後の大雨と台風に備える農作物等の対策 農業技術情報（第2号）

大阪管区气象台による「近畿地方1か月予報」(令和2年5月28日発表)によると、暖かい空気に覆われやすく、向こう一箇月の平均気温は高い見込みであり、特に期間の前半はかなり高くなる可能性があります。

暑熱環境下で作業を行うことが多くなりますので、こまめな水分、塩分補給や休憩を心がけ、特にマスクを着用しての作業では熱中症に注意し、屋外で人との十分な距離(少なくとも2m)が確保できる場合は、マスクを外すなど対処する。

一方で、九州南部が平年比1日早い5月30日ごろ、四国が平年比5日早い5月31日ごろに梅雨入りしたとみられるとの発表がされたところです。これから近畿地方でも集中豪雨(梅雨)や台風が多い時期になります。

については、以下の事項を参考に、農作物の適切な管理と高温時の作業者の健康管理を呼びかけてください。

1 水稲

- (1) 生育前半が高温傾向で推移した場合には、稲の生育が旺盛となり、過剰分けつや籾数過多を招き、乳白粒等を増加させる事例が見られることから、中干しの徹底等により茎数・籾数の適正化に努める。
- (2) 台風接近前に、あらかじめ、排水路、ほ場内の排水溝等の点検及び補修整備を行う。稲体が風の影響をなるべく受けないように深水湛水する。
- (3) 台風通過後は、排水路の浮遊物や泥を除去し、速やかな排水に努め、できるだけ葉を水面に出すようにする。間断灌かん水を行い、生育の回復を図る。
- (4) 水田冠水後に黄化萎縮病の発生が懸念されるが、対象薬剤が1剤で収穫90日前までのため、常発地では栽培初期の薬剤散布を検討する。

2 豆類

- (1) 作付前から、排水溝や明きよの設置とそれらの排水口への連結を確実にし、ほ場内の過剰な水分の排出を促す。
- (2) 浸水、冠水の被害を減らすために、作付中も排水口や明きよの点検を行うことにより、普段から速やかなほ場排水に努め、土壌の乾燥を促す。
- (3) 水が引いた後は、病害の発生を防ぐため、殺菌剤による防除を行う。
- (4) 生育初期に湿害を受けた場合は、湿害の程度に応じて再は種を行い、被害の軽減に努める。なお、晩播は生育量が低下するので、は種量を増やすなどの対策により、生育量の確保に努める。

3 野菜・花き

(1) 高温対策

- (ア) かん水は、立地条件や品目、生育状態を十分考慮し、早朝または夕方に実施する。
- (イ) 地温上昇の抑制や土壌水分保持のため、マルチや敷き藁などを活用する。
- (ウ) 施設栽培では妻面開放や遮光資材等を使用し、施設内の温度上昇を抑制する。
- (エ) 育苗箱は、コンテナなどでかさ上げして通風をよくする。

(2) 台風通過前

- (ア) ハウス栽培では、ハウス内に風が吹き込まないように、被覆資材破損部を補強し、しっかりと閉めきる。また、資材固定金具やハウスバンドが緩んでいないか点検して締め直し、サイドが風であおられないよう固定する。
- (イ) 露地栽培では、支柱やフラワーネットを点検して補強し、しっかり固定する。直播きでまだ生育初期の場合は、べたがけ資材等で茎葉を押さえる。その際、べたがけ資材は風にあおられないようにしっかり固定する。また、ほ場が冠水しないよう、排水路を整備する。

(参考) 園芸ハウス台風対策マニュアル

<http://www.pref.kyoto.jp/nosan/news/documents/detailverall.pdf>

(3) 台風通過後

- (ア) 滞水している場合は、速やかにほ場の排水に努める。
- (イ) 液肥(500~1,000倍)を施用し、草勢の早期回復を図る。
- (ウ) 風雨による傷から病原菌が侵入し、病害の発生が予想されるため、こまめに観察し、発生初期に防除を行う。
- (エ) 収穫可能なものは速やかに収穫し、また、播種直後で発芽不良の場合は、直ちに播き直しを行う。

4 果樹

(1) 高温対策

- (ア) かん水は、早めから計画的に行う。スプリンクラーや散水チューブを使用して、成木園では20mm(20t/10a)かん水する。無降雨が7日以上続く場合は、繰り返しかん水する。また、水量を節約するには、早朝又は夕方にかん水する。
- (イ) 雑草との水分の競合を避けるため、園内の草を刈り取り、その草を用いて株元にマルチを行う。
- (ウ) 園内をよく観察し、ハダニ類・カメムシ類の防除を行う。なお、間もなく収穫を迎える品目では、農薬の「収穫前日数」に十分注意する。

(2) 台風通過前

- (ア) 園内の排水対策を徹底する。
- (イ) 防風ネットは、柱の倒壊を防ぐため、控え線や杭を打って補強する。また、ネットの破れ目を補修しておく。
- (ウ) 果樹棚は、周囲線の留め金、アンカーからの控え線、吊り線を点検し、切れないよう

に補強しておく。また、棚の揺れ止め補強を行っておく。ハウス(雨よけ含む)では、被覆が破れないように、押さえバンドで補強するとともに、ハウスごと飛ばないように、柱から控え線を張って補強しておく。

(エ) 徒長枝等ではできるだけ整理して風通しを良くしておく。

(3) 台風通過後

(ア) 骨格枝が完全に折れた場合は、鋸等で折れ口をなめらかに切り戻して、癒合剤を塗布する。不完全な場合は固定し、癒合面が乾燥しないようにビニール等で覆う。

(イ) 冠水した場合は、速やかな排水に努める。

(ウ) ブドウではべと病、ナシでは黒星病や黒斑病、モモではせん孔細菌病、カキでは炭疽病等の発生が予想されるので、殺菌剤を散布する。

5 茶

(1) 気温が高い時期にはカンザワハダニ、チャノミドリヒメヨコバイ、チャノキイロアザミウマなどの害虫の被害が大きくなりやすいため、発生初期に、的確に防除する。

(2) 台風通過前

(ア) 新植、幼木茶園は、風害を受けやすいので、株元に土寄せを行う。特に、風当たりの強い箇所では、杭等に茶樹を結束する。

(イ) 傾斜地茶園では、浸食防止のため土壌表面のマルチや周辺排水溝の整備を行う。

また、新しく造成した茶園では、降雨量が多いと土壌浸食の恐れがあるため、排水路を整備する。

(ウ) 被覆棚では、ほどけた被覆資材が強風を受けて倒壊する恐れがあるため、被覆資材が支柱等へ確実に結束できているかを確認する。

(エ) 挿し木床では、トンネルのビニールが強風で飛ばされないよう、杭や紐などで固定するとともに、日よけの被覆資材を開けて、支柱等に結束する。

(オ) 製茶工場では、雨水が浸入しないように十分に点検する。

(3) 台風通過後

(ア) 茶園が浸水した場合は、速やかに排水を図るとともに、漂着物を除去する。

(イ) 強風で株元が緩んだ幼木園では土寄せを行い、地際部や根を保護するために敷草等を行う。

(ウ) 土砂が流入した場合は速やかに取り除く、また、表土が流亡している場合は早急に土入れを行う。

(エ) 製茶工場が浸水した後に、機械類に通電を再開する場合には、十分乾燥させた後、使用マニュアル等により手順や注意事項を確認するとともに、漏電やショートに留意した対応を行うこと。また、状況によってはメーカーによる点検を受けるとともに、ヘルメット等を着用して複数で作業をするなど、安全を確保する。

6 作業者の熱中症を防ぐ対策

(1) 作業環境面

(ア) 日除けや通風をよくする設備を設置し、作業中は適宜散水する。

- (イ) スポーツドリンク等でこまめに水分と塩分を補給するとともに、身体を適度に冷やすことができる氷、冷たいおしぼり等を備える。
 - (ウ) 作業中の温湿度の変化がわかるよう、温度計、湿度計等を設置する。
 - (エ) 日陰などの涼しい場所に休憩場所を確保する。
- (2) 作業面
- (ア) 十分な休憩時間や作業休止時間を確保する。
 - (イ) 作業服は透湿性、通気性の良いものを、帽子は通気性の良いものを着用する。
 - (ウ) 作業が辛いときは無理をせずに日陰の涼しいところで休憩し、水分を補給して、身体を冷やす。
- (3) 健康面
- (ア) 健康診断結果などにより、健康状態をあらかじめ把握しておく。
 - (イ) 作業開始前や、作業中に作業員間で健康状態を観察する。
- (4) 救急措置
- (ア) 近くの病院や診療所の場所を確認しておく。
 - (イ) 熱中症は、早期の措置が大切であり、少しでも異常が見られたら下記の手当を行う。
 - (ウ) 涼しいところで安静にする。
 - (エ) 水やスポーツドリンクで水分を摂る。
 - (オ) 体温が高いときは、裸体に近い状態にし、冷水をかけながら扇風機等で風をあてる。また、首、脇の下、足の付け根など太い血管のある部分を氷等で冷やす。
 - (カ) 回復しない場合及び症状が重い場合等は、速やかに医師の手当を受ける。